000360

弘法大師 空海全集

第五巻

筑摩書房

文鏡秘府論　并序　天

金對智上寺禪念沙門遍照金剛撰

夫大仙利物名教為基君子濟時文章是本也故能空中塵中開本有之字龜上龍上演自然之文至如觀時變於三曜察化成於九洲金玉笙簧爛其文而撫陰首郁乎煥其章以叙

宋本

凡　例

一　本巻には、弘法大師空海の編纂になる文学理論書『文鏡秘府論』六巻およびそれを縮約した『文筆眼心抄』一巻を収める。両書の内容は、空海自身の執筆した序を除けば、基本的には六朝から唐中期に至る中国人の著作である点を考慮して、訓み下し文、口語訳、訳注のほかに、特に原漢文を収録する。

一　本文の構成は、最初に原文と訓み下し文を二段組みで上下に掲げ、次に口語訳を一段組みで配した。また内容理解の便宜上、長文の作品は適宜いくつかの段落に分かち、さらにそのあるものには段落番号を施した。

一　原文は正字、訓み下し文は常用漢字・歴史的仮名遣い、口語訳は常用漢字・現代仮名遣いでそれぞれ表記する。訳注については、口語訳と同じ体裁を用いるが、引用文のみは歴史的仮名遣いで記す。

一　書名には『　』、作品名には「　」を付す。

〔底　本〕

一　『文鏡秘府論』は、宮内庁所蔵平安朝古抄本（一九二七年　東方文化学院影印）を底本に用い、次の諸本により校訂した。

一　高野山三宝院所蔵古抄本（三宝院本）

二　江戸期（一七世紀末？）刊本（以下、版本と称する）

三　『弘法大師全集』本（一九一〇年　祖風宣揚会編）
四　維宝『文鏡秘府論箋』（『真言宗全書』第四十一巻　一九三六年刊。箋と略称）
五　小西甚一『文鏡秘府論考・攷文篇』（一九五三年　講談社刊。攷文篇と略称）
六　周維徳校点『文鏡秘府論』（一九七五年　人民文学出版社刊。周校本と略称）
七　王利器『文鏡秘府論校注』（一九八三年　中国社会科学出版社刊）
八　『文筆眼心抄』（後出。『眼心抄』と略称）

三宝院本以外の抄本間の異同は、原則として攷文篇によった。また同時に参照した主要な研究文献には、次の諸作がある。

一　鈴木虎雄「文鏡秘府論を校勘して」（『支那学』三―四　一九二三年）
二　小西甚一『文鏡秘府論考・研究篇』上下（上冊、一九四八年　大八洲出版株式会社刊。下冊、一九五一年　講談社刊）。
三　中沢希男「文鏡秘府論校勘記」一―三（『群馬大学紀要・人文社会科学編』一三―一五　一九六四―六六年）
四　王晋江『文鏡秘府論探源』（一九八〇年　香港・天地図書有限公司刊）
五　福永光司「文鏡秘府論序訳注」（『日本の名著』三『最澄・空海』所収　一九七七年　中央公論社刊）
六　中沢希男「冠註文筆眼心抄補正」（『群馬大学紀要・人文社会科学編』二一　一九七二年）

このほか、鈴木虎雄氏旧蔵版本（京都大学文学部所蔵）には、鈴木氏による高山寺無年号大字本（乙本）との校勘記並びに案語が記されており、本文校訂に際して参照した。

一　『文筆眼心抄』は、『冠註文筆眼心抄』（『弘法大師全集』第三輯所収　一九一〇年刊）を底本とし、伝空海筆抄本の木活字翻刻本である山田鈍『文筆眼心抄釈文』（一九〇七年　山田氏私家版。『釈文』と略称）および『文鏡秘府論』によって校訂した。

一　『文鏡秘府論』は、底本と諸本間に重要な異同の存する場合にのみ、その旨注記する。それ以外の諸本間の異同は、原則として記さない。

〔原　文〕

一　字体は原則として底本に従ったが、古字・俗字・略字などの異体字は、なるべく通行の正字に改めるようにした。

（例）　貞→貌　　況→況　　惣→總　　沉→沈　　鴈→雁　　飜→翻　　鷄→雞　　最→最　　弃→棄　　虛→虛　　摸→模

一　初唐の則天武后の時代に造られた則天字は、作品成立の時期を推測する手がかりとなるところから、敢えて正字に改めず、そのまま本文中に用いた。

一　本文に引用される詩句は、二句一聯ごとに独立して掲げ、読みやすくした。

一　原注は元来双行注に作られるが、ここでは小活字で一行に組んだ（訓み下し文もこれに準ずる）。

〔訓み下し文〕

一　訓読は版本などの訓点を参照したが、必ずしもそれに従わず、あくまで訳者自身の判断によって作成した。

一　原文中の漢字は、なるべくそのまま訓み下し文にも用いるよう努めたが、ある種の助字（不、而、乎、也、哉など）は仮名書きに改めた。

〔口語訳〕

一　『文鏡秘府論』は、できるだけ多くの篇について口語訳を試みたが、一部の訳になじみにくい作品は割愛した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

一『文筆眼心抄』は、冒頭の序を除き、すべて口語訳を割愛した。注に掲げるページ数によって、『文鏡秘府論』の相当箇所を参照されたい。

一　引用の詩句については、両書の性質上すべて口語訳の対象から除き、難解の語句のみ注で説明を加えるにとどめた。

一〔　〕内は文意の理解を容易にするため訳者が補った文、（　）内は補足的な説明、〈　〉内は原注を訳した箇所であることを示す。訓み下し文、訳注にもこれらの記号を適用したところがある。

〔訳　注〕

一　出典や使用例は可能な限り調査して、注記するように努めた。但し、資料上の制約のため、推測の域を出なかったところも少なくない。

一　注釈は文学理論に関連する専門用語に主眼を置き、一般の字書にも載せられる語彙に関しては、なるべく説明を簡略にした。

一『文筆眼心抄』については、内容面にわたる注釈は一切省き、ただ字句の異同についてのみ注記するにとどめた。「而」―「向」とあれば、本文の「而」を『文鏡秘府論』では「向」に作ることを、また「古」―『釈文』固とあれば、『釈文』は空格中に「古」字を補うことを示す。『眼心抄』だけに見られる内容には、然るべき説明を加えた。

一　典拠となった詩文の所在を（　）の中に示す。但し、複数の典籍に収められている場合は、原則としてその中から代表的な書名を一つ掲出するにとどめた。

一　漢・六朝の文集は、少数の例外を除いて後世に再編されたものが多いために、なるべくその原拠となった書を挙げる。また唐人の詩句については、テキスト考証などの繁にわたる点を避けるために、原則として『全唐詩』の巻

数を示すことで統一した。

一　訳注に用いた主要な書名は次の通りである。

『易』『尚書』『詩経』『周礼』『礼記』『春秋左氏伝』『論語』『爾雅』『孟子』（以上、『十三経注疏』本　台湾・芸文印書館影印刊）

『韓詩外伝集釈』（許維遹校釈　中華書局刊）

『説文解字注』（段玉裁撰　台湾・芸文印書館影印刊）

『広韻』（宋本　台湾・芸文印書館影印刊）

『韻鏡』（李新魁校証　中華書局影印刊）

『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『晋書』『宋書』『南斉書』『梁書』『魏書』『北斉書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『旧唐書』『新唐書』（以上、標点本二十四史　中華書局刊）

『国語』『戦国策』（上海古籍出版社刊）

『山海経校注』（袁珂校注　上海古籍出版社刊）

『荀子』『孔叢子』『老子』『墨子』『管子』『韓非子』『呂氏春秋』『淮南子』『抱朴子』（以上、『諸子集成』本　中華書局刊）

『荘子集釈』（郭慶藩輯　中華書局刊）

『法言』『白虎通』『西京雑記』『世説新語』（以上、『四部叢刊』本）

『顔氏家訓彙注』（周法高撰輯　台湾・国風出版社刊）

『顔氏家訓集解』（王利器著　上海古籍出版社刊）

『博物志校証』（范寧校証　中華書局刊）

『搜神記』（汪紹楹校注　中華書局刊）

『北堂書鈔』（台湾・文海出版社影印刊）

『芸文類聚』（汪紹楹校　中華書局刊）

『初学記』（中華書局刊）

『太平御覧』（中華書局影印刊）

『広弘明集』（『大正新修大蔵経』巻五十二）

『楚辞補注』（白化文等点校　中華書局刊）

『嵇康集』（魯迅編『魯迅全集』第九巻　人民文学出版社刊）

『嵇康集校注』（戴明揚著　人民文学出版社刊）

『陶靖節集注』（陶澍撰　香港・太平書局刊）

『陸士龍文集』『鮑氏集』『謝宣城詩集』『江文通文集』『徐孝穆集』『庾子山集』（以上、『四部叢刊』本）

『文選』李善注（宋淳熙刊胡氏重刻本　台湾・芸文印書館影印刊）

『文選』六臣注（『四部叢刊』本）

『玉台新詠』（明趙氏刊本　文学古籍刊行社影印刊）
『玉台新詠箋注』（穆克宏点校　中華書局刊）
『河岳英霊集』（『四部叢刊』本）
『文苑英華』（中華書局影印刊）
『文館詞林』（古典研究会影印刊）
『楽府詩集』（中華書局刊）
『全唐詩』（中華書局刊）
『全唐文』（台湾・文海出版社影印刊）
『文心雕龍注』（范文瀾注　人民文学出版社刊）
『詩品注』（陳延傑注　人民文学出版社刊）
『鍾嶸詩品』（高木正一訳注　東海大学出版会刊）
『詩人玉屑』（王仲聞校勘　中華書局刊）
『吟窓雑録』（明嘉靖四十年刊　内閣文庫蔵）
『大正新修大蔵経』（大正新修大蔵経刊行会刊）

目

次

凡　例……vii
文鏡秘府論……興膳　宏訳注……三
天巻……五
序……五
調四声譜……一八
調　声……二六
或るひと曰く、凡そ四十字の詩は…（王昌齢『詩格』）……二六
元氏曰く、声に五声有り…（元兢『詩髄脳』）……四〇
詩章中用声法式……四九
七種韻……五九
四声論（劉善経『四声指帰』）……六五
地巻　論体勢等……一二五
十七勢（王昌齢『詩格』）……一二五
十四例（皎然『詩議』）……一四五
十　体（崔融『唐朝新定詩格』）……一六〇

六　義（王昌齢『詩格』・皎然『詩議』）……一七五
八　階（上官儀『筆札華梁』・『文筆式』）……一八五
六　志（『文筆式』・上官儀『筆札華梁』）……二〇一
九　意……二二四
東巻　論対……二九三
序……二九三
二十九種対（『文筆式』等）……二九六
筆札七種言句例（上官儀『筆札華梁』）……三六七
南巻　論文意……三七五
或るひと曰く、夫れ文字は皇道より起る…（王昌齢『詩格』）……三七五
或るひと曰く、夫れ詩に三四五六七言の別有り…（皎然『詩議』）……四三八
論　体……四七一
定　位……四八七
或るひと曰く、梁の昭明太子…（殷璠『河岳英霊集』序）……五〇三
集　論（『河岳英霊集』集論）……五一〇
或るひと曰く、晩代文を銓ぶ者多し…（元兢『古今詩人秀句』序）……五一五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

或るひと曰く、易に曰く……五二七
或るひと曰く、余　才子の作を観る毎に…（陸機「文賦」）……五四一
西巻　論病……五七三
序……五七三
文二十八種病（『文筆式』等）……五七九
文筆十病得失……六六七
平頭は第一句の上字と…（劉善経『四声指帰』）……六六七
『文筆式』に云へらく…（『文筆式』）……七一六
北巻　論対属……七三一
論対属……七三一
句　端（杜正倫『文筆要決』）……七四五
帝徳録……七九四

文筆眼心抄……興膳　宏　訳注……九一一

序……九一三
目　録……九一五
凡　例……九二一

声韻　調四声譜……九五二
調　声……九五六
八種韻……九六八
六　義……九七二
十七勢……九七六
十四例……九九〇
二十七体……九九六
八　階……一〇一二
六　志……一〇一七
二十九種対……一〇二〇
七種言句例……一〇四三
文二十八種病……一〇四五
筆十病得失……一〇七四
筆二種勢……一〇八七
文筆六体……一〇八九
文筆六失……一〇九〇

定位四術……一〇九四
定位四失……一〇九五
句端……一〇九七
解説……二二三
索引……1

第五卷　詩文篇一

文鏡秘府論

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com